

私には妹がいる。すごく元気でうるさい妹だが、妹がいるだけで私の家族は明るくなれる。そんな妹が元気がない時期があった。それは幼稚園の頃、なんでも他の友達との違いを見つけしまったからだそうだ。妹は耳が聞こえない。聞こえないというより、聞きとりにくい。そのため小さな頃から補聴器をしている。その補聴器を自分は付けていて、周りの友達は付けていないのを見て嫌になっただけらしい。

そんなある日、妹が私に聞いてきた。

「耳が普通に聴こえるってどんな感じ？」

「どうして私だけ耳が悪いの？」

小学生だった私は何も答えられなかった。何を言っても妹を傷つけてしまうと思ったからだ。この質問をされたことを親に言うこともできなかった。妹の耳が悪いことを知った二歳の頃から、ろう学校や病院、少しでも良くなるよう、例え噂でも治癒力のある温泉の水があるとそれを買うに行くなど、出来ることをしてきた両親を苦しめるかもしれないようなことは言えなかった。私は自分が情けなくなかった。

その日の夜、家族で食事していると妹は突然言った。

「パパ、ママ、どうして私の耳って聞こえないの？」

私はその場から出て行きたくなった。続きを見たくなかった。気まずかった。私は椅子から立ちあがり部屋を出ようとすると、母が、

「どこ行くの。まだご飯の途中でしょ。ちゃんと食べなさい。」

いつも通りの表情で私に言った。私は席に戻りまた箸を持った。それを見てから母はこう続けた。「怜ちゃんの耳が何で悪いかは正直分からない、ごめんね。でも、そんな怜ちゃんがママとパパ、お姉ちゃん達の家に生まれたのには絶対意味があるんだよ。それに怜ちゃんは、他の人より耳は悪いかもしれないけど、その代わりに、他の人よりいい所もたくさんあると思うの。きれいな事聞えちゃうけど、怜ちゃんも朋ちゃんもママとパパの子だから、一杯愛して幸せにするからね。皆で怜ちゃんの耳がよくなるように助け合おうね。」

私は泣きそうになった。今まで元気がなかった妹が嘘のように明るい顔で、こう言ったからだ。「そうだね。私、皆より耳は悪いけど目はすごくいいんだよ。それにこの前、〇〇先生に元気だねってほめられたの。あとね、あとね、友達のパパとママは喧嘩しちゃうけど、私のパパとママはしないし、おねえは優しいし、大好きなの！だからね、幸せだからもういいや！」

と言いつつ私を抱きついて、また母が、

「だからまだご飯中だからだめ。」

と笑いながら言った。ドラマの中でしか出てこないような会話だったが、とても幸せになれた。私も妹の質問に答えられずモヤモヤしていたが、父、母、妹と笑ったら飛んでいってしまった。その日から妹は変わった。自分の持っている障がいので消極的になっていたが、何事にも

積極的になった。今までは自分から話しかけることができなかったが、自ら人に話しかけ友達を作っている。そして毎日のことを楽しそうに話していた。父と母は、相変わらず仲良く私たちの話を聞いてくれている。私はもつと家族について考えるようになった。たしかに妹の耳が悪いことは、他人とは違うことで苦しいことも多いかもしれない。でも、そのおかげで私達家族は、誰よりも仲良く笑顔でいられるのだと自信をもって言える。「家族の大切さ」を改めて教えてくれた出来事だった。

そして私が高二、妹が中三になった今も、それは変わっていない。それどころか妹はより明るい性格になり、いつも私達に笑顔をもたらしてくれている。喧嘩もたくさんする。妹と。親と。それもくだらないことで。しかしおもしろいことに気付くと仲直りしていて、一緒に笑っている。そのたびに、

「家族とは不思議だ。喧嘩もするけれど、そういう日常が『幸せ』だな。」
と感じさせられる。あの日母に言われた

「一杯愛して『幸せ』にしてあげる。」

この言葉通りに今、私は『幸せ』だ。それは妹も同じなようで、つい最近も

「私と朋は『幸せ』だね。」

と話した。私の中の『幸せ』は、すごくおいしい物を食べることでも、有名人に会うことでも、ずっと欲しかった物を手に入れることでもない。しかし実際には、うれしくて

「幸せだわ。」

と言ってしまうが、これは本当の『幸せ』ではない。何事もなく毎日を家族揃って過ごす事が私にとつての『幸せ』だ。家族の皆、『幸せ』をありがとう。これからも『幸せ』にして下さい。私も皆を『幸せ』にします。